

Title	イングランド内乱軍事史：新型軍研究を中心として
Sub Title	On the military history of the English Civil War : with special emphasis on the new model army
Author	北條, 雅人(Hojo, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.2 (1997. 1) ,p.141(289)- 152(300)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学説史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970100-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イングランド内乱軍事史

— 新型軍研究を中心として —

北條 雅人

一六四二年、ステュアート朝イングランドで勃発した内乱の研究は、憲政史、思想史、社会史、あるいは地方史など諸分野において精力的に行われ、多大の成果をもたらしてきた。しかしながら、これら内乱史研究のある分野には、依然として大きな欠落があると言わざるを得ない。内乱を物質的力の衝突、つまり「戦争」の面から扱う軍事史の分野である。

内乱を小さな武力衝突に留まらず、三つの王国を巻き込む、期待も予想もされていなかった戦争にまでエスカレートさせ、またその戦争の帰趨を最終的に決定づける共和国を用意した力の正体を問えば、それは暴力装置である軍隊、及びその軍隊を動かしていた行政機構に他ならない。この軍隊と行政とがいかなる過程をたどって当時のイングランド社会から産み出されたのか、それらは

イングランド内乱軍事史—新型軍研究を中心として—

同時代の大陸諸国のシステムと比べていかなる能力を備え得たのか、そしてそれらは産みの親たる社会に何を要求し何をもたらしたのか。かかる疑問を明らかにすることは、単に軍事史と云う一研究分野での欠落を埋めるのみならず、内乱史のあらゆる分野が共有するに足りる基礎的な知識と前提の発見と提供につながるのではないだろうか。

この試みのひとつの出発点として、本稿では内乱の軍事史を概括してみたい。

一

S・R・ガードナーの弟子であり、「普遍的眞実」を追求した一九世紀の偉大な歴史家たちの文字通り最後のひとりであるサー・チャールズ・H・ファースは、師の

仕事を引き継いでイングランド内乱史に多くの業績をしるしたが、軍事史もまた、彼が分け隔てなく興味を抱き掘り下げたところの対象のひとつであった。ファースが一八九九年に著わした「鉄騎隊の編成」(C.H. Firth, 'The Raising of the Ironsides', *TRHS*, ii-xiii, 1899, pp.17-73)は、その仇名で有名なクロムウエルの騎兵連隊の歴史を、それが内乱勃発直後にエセックス伯軍の六七番目の騎兵中隊として編成された時点から新型軍の創設に至るまで追跡した精密な部隊史であると同時に、また内乱初期の議会軍に関する多くの情報や示唆を含んだ百科全書的な性格をも有している。彼は早くから宗教が軍隊に対して果たした役割に注目しており、隊内における宗教上の制度慣行について特に一項を割いている。

軍事史においてファースの名を不滅にしたのが、一九〇二年の『クロムウエルの軍隊』(C.H. Firth, *Cromwell's Army*, London, 1902)である。これは「鉄騎隊の編成」で試みられた百科全書的方法論を徹底し、彼の時代において考えられ得た限りの諸側面から「クロムウエルの軍隊」、すなわち新型軍の実体に迫ろうとしたもので、内容は編制・兵器・戦術・財務・医療・福祉・待遇・規律などのシステム面の分析と、政治と宗教にかかわる理念

(軍隊精神)一面の分析との大きく二つの領域に分けられる。

うちシステム面の分析は、新型軍そのものに関する厚で広範な事実の羅列に今さらに加えることはほとんどないが、しかしながら内乱期を戦った他の軍隊(エセックス伯軍、東部連合軍、そして何より敵手である国王軍)と、新型軍を実際に編成し、維持し、作戦させていたところの議会の統治機構内部の軍事行政とに対するアプローチはあくまで余録に過ぎず、決して充分ではない。

また理念面の分析については、ファースはあくまで十九世紀知識人の主観の眼でこれを行い、その観点より十七世紀当時の固有の政治的及び宗教的イデオロギーを把握せんとしてしまっている。例えば彼が独立主義を「教会の民主制」と呼び、これが自然の成行きで「国家の民主制」にイングランド共和国へと発展したのだと言うのはもちろん現代ではそのまま適用できないテーゼである。しかしながら、新型軍が一六四七年のクーデタへと到達する政治的過程を説明する上で、ファースは軍の内部に一般の社会秩序からある程度の距離を保つ一種の思想的解放区が存在、言わば「塹壕の中の平等」を発見し、独立派と長老派との対立はその中でこそ発生し発展し得た

ことを初めて明らかにした。さらに彼は、かような無形のイデオロギーに基づく現象を分析するために数字と云う形ある道具を導入し、将校団の党派分析などに用いている。

ファースの晩年の興味は「鉄騎隊の編成」のもうひとつの側面である部隊史に移り、新型軍の創設から護国卿政の崩壊までの各騎兵及び歩兵連隊の詳細な編制・戦歴・人事を記した『クロムウェル軍連隊史』(C.H. Firth, G. Davies, *The Regimental History of Cromwell's Army*, 2 vols., Oxford, 1940.) の執筆に取り組んだ。彼はその完成を見ずに亡くなるが、仕事は弟子で共同研究者であるゴドフリ・デーヴィスが引き継いだ。

この著作以外にもデーヴィスはファースの手法に倣って、内乱の軍事史に幾つかの業績を残している。その主なものは、小さな史料集である「第一次内乱関連文書」(G. Davies (ed.), 'Documents Illustrating the First Civil War', *JMH*, iii, 1931, pp.64-71.)、東部連合軍の編制と財務に関する覚書である「東部連合軍」(G. Davies, 'The Army of the Eastern Association', *EHR*, xlvii, 1931, pp.88-96.)、そして今日に至るまでなおエセックス伯軍に関する唯一のまとまった叙述であり続けている「エ

イングランド内乱軍事史—新型軍研究を中心として—

セックス伯麾下の議会軍、一六四二—一六四五年」(G. Davies, 'The Parliamentary Army under the Earl of Essex, 1642-45', *EHR*, xlix, 1934, pp.32-54.) である。このいづれもが、ファースの研究の欠落と欠陥を補完して、いつそう包括的で総合的な内乱の軍事史の体系づけへと発展する萌芽となり得たかも知れないが、しかしデーヴィスは先に進むことはしなかった。

二

ファースとデーヴィスの後、内乱の軍事史は長い眠りの時代を迎える。ジェントリ論争を経て人々の注目は社会史と経済史に集まり、表舞台からはずれた軍事史研究はもっぱら純粹な戦史の分野でのみ続けられていた。⁽¹⁾

内乱史全体から見た軍隊の役割に再び光が当てられたのは、一九七〇年代に入ることであった。その端緒は行政史の分野でつけられた。⁽²⁾ 既に五七年の「行政改革の試行、一六二五—一四〇年」(G.E. Aylmer, 'Attempts at Administrative Reform, 1625-40', *EHR*, lxxii, 1957, pp.229-259.) で前期ステュアート朝治下の軍の兵站部門に触れていたG・E・エイルマーは、七三年に刊行された『国家の役人たち、イングランド共和国の官職—

六四九―六〇年』(G.F. Aymer, *The State's Servants; the Civil Service of the English Republic, 1649-1660*, London, 1973.) において、この大著全体に比すればそのごく一部ではあるが、初めて空位期の軍事行政の組織・運用・人事などを正面から扱った。のみならず、当時の行政の実像(行政の機能の地域的社会的な限界、官職保持者たちの出身や社会的地位)を理解する上で取るべき態度、また内乱と云う異常事態が統治にもたらした影響に関する見解など、彼がこの本で示した多くの指針は、対象を軍事行政にのみ絞った研究にとっても重要な手がかりとなっている。

このエイルマーの仕事に呼応するように、行政の能力と云う物質的な限界を客観的に把握し、それを下敷として論を立てる政治史の視点が出現した。クリーヴ・ホームズが七四年に著わした『イングランド内乱下の東部連合』(C. Holmes, *The Eastern Association in the English Civil War*, London, New York, 1974.) は、内乱当初は議会派の一部と云うよりはむしろウェストミンスターの同盟者とも呼ぶべき独立性を備えていた東部連合が、中央集権化の進行に従い次第に議会の戦時体制下に組み込まれてゆく政治的過程を明らかにしたのだが、この著作

ではさらにかような議論の前提として東部連合の置かれていた軍事的な状況、その状況に基づいて立てられた戦略、その戦略に基づいて定められた東部連合軍の編制・財務・任務、そしてそれらいつさいの動的・時系列的な変遷についての分析がなされている。この後者の性格においては、ファースがついに描かなかつた東部連合軍の肖像画と言えるものである。

今ひとつ、マーク・A・キシュランスキの七九年の著作『新型軍の台頭』(M.A. Kishlansky, *The Rise of the New Model Army*, Cambridge, 1979.) は新型軍の創設から四七年のクーデタまでを扱っているが、これはJ・H・ヘクスターからロッテ・グロウ、デーヴィッド・アンダーダウンらの内乱の議会政治史の流⁴れの延長線上に位置づけられる。キシュランスキは議会の軍事行政機構の設置運営や莫大な軍事費の調達を、その時々⁴の政治的妥協の産物として捉えた。彼はこの観点より、従来言われてきた「議会」対「軍部」と云う権力闘争の構図に新たに「ロンドン市」と云う第三勢力を加えて、新型軍の政治化と叛逆の過程を見事に描き直している。しかしながら、あまりに功利的な政治力学で全てを説明しようとしてイデオロギーとしての宗教の影響を軽視し過ぎている

点、軍隊の「意志」がどこにあり何であったかを見る上で将校団と兵士たちとの立場の区別が不分明な点、また平等派の運動が軍内部に浸透する過程の説明が不充分である点など、そのみでは内乱の政治史を総括するには未だ完全とは言えず、むしろ新たな軍事史への大きな提言として評価できる。

行政あるいは軍事行政を重視したその他の業績としては、J・S・モリルの地方史研究が挙げられる。彼の「イングランド地方軍における叛乱と不穏、一六四五―四七年」(J.S. Morrill, 'Mutiny and Discontent in English Provincial Armies, 1645-1647', *PP*, lvi, 1972, pp.49-74.) は、第一次内乱後半の多くの地方部隊における兵士の叛乱や不服従の事例を検討し、それらが単純に給与や規律への不満によってのみ起こされたのではなく、中央における政治・イデオロギー運動の影響を少なからず被っていたことを明らかにした。彼によれば、地方共同体内部の分裂や対立は、大多数の住民の反軍感情に基づくばかりでなく、部隊の解隊の是非や指揮権をめぐる支配エリートの権力闘争にも起因していたのである。モリルにとってこの論文は、彼の研究の重要な主題である内乱期の地方における党派の問題(政治的のみなら

ず社会的な)、及び地方の中央からの独立性・自立性の問題を扱うための前提であった。これらの問題に関するいっそう包括的で詳細な議論は、四年後に刊行された『地方の叛乱、イングランド内乱における保守派と過激派 一六三〇―一五〇年』(J.S. Morrill, *The Revolt of the Provinces: Conservatives and Radicals in the English Civil War, 1630-1650*, London, 1976.) の中で展開されている。⁽⁵⁾

政治や社会をまったく離れて、きわめて狭い意味での軍事行政を扱っている研究としては、S・J・スターンズの七八年の「十七世紀初頭における兵站の問題」(レー鳥攻防戦)(S.J. Stearns, 'A Problem of Logistics in the Early 17th Century: The Siege of Re', *Military Affairs*, 1978, pp.121-126.) やJ・S・ホイラーの八六年の「イングランド軍の財務と兵站、一六四二―一六〇年」(J.S. Wheeler, 'English Army Finance and Logistics, 1642-1660', *Univ. of California*, Ph.D. thesis, 1980.) などがある。前者は、大陸諸国に比してはるかに技術的に遅れをとっていたイングランド軍の兵站を、そのレー鳥遠征のための兵員及び補給の輸送計画を分析し、またそのように無謀な計画を担当者に策定させるに至った背景

(軍事的に経験不足だったと云うばかりでなく、イングランドの中央行政そのものの限界による)を明らかにすることで説明している。

一方ウエーラーの論文は、査定税、消費税、関税を柱とする議会の戦時徴税の有効性が戦争の進展に従って逐次改善され、やがてスコットランドやアイルランドで大兵力を作戦させ得る態勢が整えられるに至るまでの過程を、議会の財務計画とその実際の収支の分析によって叙述した。彼はマイケル・ロバーツの「軍事革命」テーゼを直截に摂取し、これに沿う形で、議会の官僚的中央集権化と常備軍の創設こそが内乱を終息せしめ三王国を統一せしめた最大の原動力であったのだと評価している。

一般に同時代の大陸諸国に比べると、イングランドではとりわけ中央政府が常備軍を持つことへの反対や嫌悪が根強かったとされる。そのようなイングランドの反軍感情や反軍運動の歴史を扱ったのがロイス・G・シュウエーラーの『常備軍反対!』(L.G. Schworer, "No Standing Armies!"; the Antimilitary Ideology in Seventeenth-Century England, Baltimore, London, 1974.)である。この本の叙述は一六二八年の「権利の請願」の提出に始まり、一

六九七年のアウグスブルク同盟戦争直後に起こった常備軍の維持をめぐる政府と議会との対立にまで至る。内乱期に直接に関係しているのは、民兵条例の成立を扱った章と、クーデタ以後の新型軍を扱った章である。中央政府の支配の道具としてかつてない規模と力を有した新型軍は、軍に属さないあらゆる人々からの憎悪を浴びていた。シュウエーラーによれば、伝統的な反軍運動はこの時代を通じて、ハリントン『オシアナ共和国』に代表されるような反軍イデオロギーへの結実を遂げた。そして軍事力の中央集権化と職業軍隊化を否定し、議会と地方の下に民兵制度を再興することを主張するこのイデオロギーこそが、十七世紀後半の論争における一方の側の理論的支柱となったのだと説明されている。

シュウエーラーが支配層の反軍思想を対象としたのに対して、イアン・ロイは戦争と軍隊が社会生活に実際に与えた傷について「イングランドはドイツになったのか? 欧州の状況と比較した内乱の結末」(I. Roy, "England turned Germany?; the Aftermath of the Civil War in its European Context", *TRHS*, iv-xxviii, 1978, pp.127-144.)で考察を加えた。彼はこの論文で、第一次内乱で最大の激戦が繰り広げられた西部地方を取り上

げ、内乱は従来考えられていたように「穏健に」遂行されてきたわけでは決してなく、国王軍も議会軍も略奪を作戰の一環として日常的に行い、その結果、この地方の社会と経済はきわめて破壊的な痛手を被り、内乱終結後もしばらく立ち直れなかったことを明らかにした。彼は結論として、戦場となった地域地域を局所的に見るならば、イングランド内乱も三十年戦争も及ぼした惨禍の程度と云う点ではほとんど変わりなかったと述べている。

ドナルド・ペニントンも八二年の論文「戦争と民衆」(D.H. Pennington, 'The War and the People', in J.S. Morrill (ed.), *Reaction to the English Civil War, 1642-1649*, London, 1982.) において、ロイと同様の結論を引き出している。軍隊の無償宿営、家屋の破壊、食糧や馬の徴発、組織的な略奪行為、地方行政の混乱、重税、それに疫病の流行が、直接戦争に巻き込まれなかった幾つかの州を除く、国中の大部分の地域で人々の産業と生活を脅かした。小さな町にとっては、守備隊の駐屯さえもが深い苦しみとなった。

三

ここまで見てきたような議会軍の軍事史研究の進展に

イングランド内乱軍事史—新型軍研究を中心として—

比べて、国王軍を含めた王党派に関する研究の状況はあまり芳しくない。この分野での初期の研究は、六二年のイアン・ロイの「王党派の軍事評議会、一六四二—四六年」(I. Roy, 'The Royalist Council of War, 1642-6', *BIHR*, xxxv, 1962, pp.150-168.) である。彼は内乱の全体像を把握するための王党派研究の第一段階として、その戦争最高指導機関たる軍事評議会を対象に選んだ。論文の大半は軍事評議会の成立過程・組織・機能・権限(例えばオクスフォードの議会との関係において)の分析に割かれているが、国王を中心とした人的関係が戦略の策定に及ぼした影響についても触れられている。

イェンス・エンゲベルクは六六年の「イングランド内乱における王党派の財政」(J. Engberg, 'Royalist Finances during the English Civil War', *Scandinavian Economic History Review*, xiv, 1966, pp.73-96.) で、戦争遂行の資源としての財政の分析を試みたが、一次史料の絶望的な散逸のためにその有効性を数字に基づいて明らかにすることまでは及ばず、財務行政の機構をスケッチし、収入の種別及びその各々の質的、量的優劣を相対的に叙述するに留まった。

以後の王党派研究はかようなロイとエンゲベルクの限

界を出発点とし、パトロネージや党派、理念の分析に重点を移した⁽⁸⁾。例えばジョイス・L・マルコム⁽⁹⁾の七八年の「兵士を求める国王、一六四二年のチャールズ一世」(J.L. Malcolm, 'A King in Search of Soldiers'; Charles I in 1642, *HJ*, xxi, 1978, pp.251-273.) は、内乱勃発直後の国王による兵力の召集を扱った。彼は、国王の大義が北部地方においてすら住民の積極的な支持を得られなかったために、王党派は民兵の動員や安定した財源の確保に失敗し、代わりに従来考えられていたよりもずっと多く、カトリックの支援に頼らざるを得なくなったと結論づけた。

八一年にロナルド・ハットンが著わした『王党派の戦争努力、一六四二―四六年』(R. Hutton, *The Royalists War Effort, 1642-1646*, London, 1982.) は、王党派の結集から政治的分裂、そして軍事的敗北に至るまでの過程を、兵力の動員に始まる戦時態勢構築の分析、国王を中心とした意志決定機構の分析、有力者たちの伝記研究、そしてオクスフォードと地方との関係の分析などによって多方面から浮き彫りにせんとしたものである。ハットンによれば、開戦当初、地方の強固な中立主義に阻まれて民兵の動員をなし得なかった王党派は、地方共同体を

戦争に動員し統合された軍事力を構築することについて成功しなかった。それどころかネーズビで野戦軍が失われた以後は、クラブメンに代表される中立主義の表立った反抗をもちや抑えることはできず、混乱の中で新型軍の最後の攻勢を迎えねばならなかった。エングベルクが突き当たったのと同じ障害のために、操作されている事実の厚さはファースやホームズのそれと比べるべくもないが、王党派の側から観た事実上最初の内乱の軍事史概説として、両者と等しい価値を有する⁽⁹⁾。

P・R・ニューマンは、かつてファースが行った新型軍將校団の党派分析と同じ手法を王党派に応用した。その「王党派將校団、一六四二―六〇年 社会構造の反映としての軍の統制」(P.R. Newman, 'The Royalist Officer Corps 1642-1660; Army Command as a Reflexion of the Social Structure', *HJ*, xxvi, 1983, pp.945-958.) の中で、彼は内乱期と空位期全体に渡って一六三〇名の王党派の將校たちの社会的出自を分析している。ニューマンはマルコムと同じく、多数のカトリック及び非国教徒を將校団の中に発見したが、彼らを議会軍の將校たちと決定的に区別するような身分上あるいはイデオロギー上の強い共通性は見出し得なかった。しかしながら彼は逆に、

このことこそが国民の中での国王への支持が特定の層や地域に偏在しなかった証拠であり、ゆえに国王軍は長期に渡って戦いを継続し得たのであると述べている。

ニューマンはこのテーマをさらに追求し、九三年に『いにしへの奉仕 王党派の連隊長たちと内乱、一六四一〜四六年』(P. R. Newman, *The Old Service: Royalist Regimental Colonels and the Civil War, 1642-46, Manchester, New York, 1993*) を世に送り出した。この著作の中では、彼は分析の対象を主として大佐クラスの将校たちに絞り、彼らの出自や個人的性向のみならず、国王に忠誠を尽くすと云うことが当時の人々にもたらしていた意味についても考察を加えた。その結果、彼は「王党派将校団」で述べた王党派の強固で熱意に満ちた団結と戦意を再び見出すに至った。彼によれば、カトリックを含む貴族とジェントリの将校たちの忠誠心は、政治や宗教の原理などではなく、伝統的な義務の観念にこそ立つものであった。

四

ファースよりおおよそ一世紀間に及ぶ内乱の軍事史を、以上取り上げてきた数々の手法・業績を撰取した上で、

イングリランド内乱軍事史―新型軍研究を中心として―

ひとつの集大成をなすことを目論んだのがイアン・ジェントルズである。彼は七五年に、その政治的な重要性にもかかわらず、従来漠然とのみ捉えられていた議会軍將兵の給与の問題を具体的に分析し整理した「第一次内乱終結時における議会軍の給与と遅配」(I. Gentles, 'The Arrears of Pay of the Parliamentary Army at the End of the First Civil War', *BHR*, xlviii, 1975, pp.52-63.) を著し、また八三年には新型軍創設以後のロンドン市をめぐる権力闘争を、プライドのページによって議会が屈伏したのと同時にロンドン市もまた軍に屈伏する結末に至るまで叙述した「第二次内乱におけるロンドン市をめぐる闘争」(I. Gentles, 'The Struggle for London in the Second Civil War', *HJ*, xxvi, 1983, pp.277-305.) を発表した。その後、長期間の入念な準備を経て彼が九二年に送り出したのが『新型軍 イングリランド、アイルランド、スコットランド、一六四五〜五三年』(I. Gentles, *The New Model Army: in England, Ireland and Scotland, 1645-1653*, Oxford, 1992.) である。

この著作は、新型軍の編成・兵站・財務を扱った軍事行政史、第一次〜第三次内乱のみならず初めてアイルランド遠征を詳細に扱った戦史、そして新型軍の創設より

ランプ議会の解散にまで至る政治史から構成されている。ジェントルズは、ファースの『クロムウエルの軍隊』では大部を占めていた戦術や編制、指揮系統、さらに軍そのものに属する(つまり司令官付きの財務官や参謀将校たちの管轄下にある)行政には改めて手はつけず、代わってウエストミンスターの統治機構の枠内での、言い換えれば文民が中央で掌握するところの軍事行政の分析をきわめて重視し、それによって議会軍の実力を再評価しようとしている。例えば、徴兵及び財務に対するつぶさな検討を通して、彼は脱走による新型軍の兵力損耗が従来の考え¹⁰⁾よりはるかに大きかったこと、そして新型軍の編成と時を同じくして急速かつ全国的に整備された軍事行政が、そのような膨大な損耗を十分かつ恒常的に補うだけの徴兵を計画し実行する能力を発揮し得たことを発見したのである。

またファースと同様、ジェントルズは特に独立した一章を設けて隊内における宗教を論じている。この中でジェントルズは、ファースが述べたような一般社会から乖離した軍特有の宗教的存在を肯定しているが、しかし同時に、各将兵の階級や出自を無視して軍全体を単一として扱うことの危険性を警告している。かような注

意深い態度は、軍の政治化の問題を扱うに際してもそのまま適用されている。新型軍の政治史を書き直すにあたって、彼は「全軍会議」「兵士代表」のイデオロギー的団結の神話を覆した。また平等派をまったく軍外部の勢力であったと断じ、その浸透工作は第一次内乱の終結後、すなわち将兵が戦場から帰還して再び一般社会と接触をもった時点で初めて可能になったのだと述べている。

ジェントルズの『新型軍』の出現は、内乱の軍事史における『クロムウエルの軍隊』以来の大きな節目であると云うばかりでなく、内乱研究全体の中で軍事史それ自体が持つ価値と可能性とを改めて明らかにした事件だと評価できる。この本で示されている他分野の成果からの積極的包摂、そしてまた他分野との関係を前提に置いた上での問題の提起・解決と云う双方向的、学際的な研究態度は、ややもすれば自己完結的な傾向に陥りやすい軍事史もしくは軍事行政史が将来に発展する方向のひとつを教えているように、強く感じられるのである。

注

- (1) 例へば A. Woolrych, *Battles of the Civil War*, New York, 1961; P. Young, *Edgehill 1642, the Campaign and the Battle*, Kineton, 1967; P. Young, R. Holmes, *The English Civil War; a Military History of the Three Civil Wars, 1642-1651*, London, 1974. など。
- (2) 内乱期の行政に関する初期の研究は R.D. Richards, 'The Exchequer in Cromwellian Times', *Economic History (Supplement of Economic Journal)*, ii, 1930-33, pp.213-233; D.H. Pennington, 'The Accounts of the Kingdom, 1642-49', in F.J. Fisher (ed.), *Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England, in Honour of R.H. Tawney*, Cambridge, 1961. などを参照のしよう。
- (3) エイムラーはこの著作及び『国王の役人たち、チャールズ一世治下の官職 一六二五—一四二一年』(G.F. Aylmer, *The King's Servants; the Civil Service of Charles I, 1625-1642*, London, 1972.) によつて内乱前後の国家行政を分析したが、内乱期そのものは、確たる結論を導き出すにはあまりに不安定な過渡期であるとして対象とはしなかつた。
- (4) J.H. Hexter, 'The Problem of the Presbyterian Independents', *AHR*, xliv, 1938-39, pp.29-49; do., *The Reign of King Pym*, London, 1941; L. Glow, 'Pym and Parliament; the Methods of Moderation', *JMH*, xxxvi, 1964, pp.373-397; do., 'Political Affiliations in the House of Commons after Pym's Death', *BIHR*, xxxviii, 1965, pp.48-70; do., 'The Committee of Safety', *EHR*, lxxx, 1965, pp.289-313; do., 'The Committee-Men in the Long Parliament, August 1642-December 1643', *HJ*, viii, 1965, pp.1-15; V. Pearl, 'Oliver St. John and the "Middle Group" in the Long Parliament; August 1643-May 1644', *EHR*, lxxxii, 1966, pp.490-519; D. Underdown, *Pride's Purge; Politics in the English Revolution*, Oxford, 1971. など。
- (5) 地方史の分野における軍事史的研究の展開によつて、他日を期して述べたい。
- (6) 近年の軍事革命テーゼの流れによつて J. Childs, *The Armies and Warfare in Europe, 1648-1789*, Manchester, 1982; G. Parker, *The Military Revolution; Military Innovation and the Rise of the West*, Cambridge, 1988; J. Black, *A Military Revolution?; Military Change and European Society, 1500-1800*, London, 1991. などを参照のしよう。
- (7) このようには、国家が中央統制された経済システムを有してない時代を研究対象とする上で、戦争の影響を国家の領域を単位としてまとめて扱うことの危険性を意味している。
- (8) 議会軍に対する国王軍の経済的、軍事的な劣勢が戦局に及ぼした影響については I. Roy, 'The Royalist Army in the First Civil War', Oxford Univ., Ph. D. thesis, 1963. や、また国王軍の軍制や軍隊生活に関つては P. Young, W. Emberton, *The Cavalier Army, Its Organization and Everyday Life*, London, 1974. を参照されたい。遺稿として未読である。

(9) R. Hutton, 'The Structure of the Royalist Party', *HJ*, xxiv, 1981, pp.553-569. をも参照のこと。

(10) ファースは、春の戦役が始まってから脱走は著しく減少したと、根拠を付さずに述べている。Firth, *Cromwell's Army*, pp.36-37.